

⑬優良林木の開発

森林面積が全国9位を誇る青森県は、多様な樹種がバランスよく分布する「森林県」として知られる。近年は伐採後に再造林されない森林の増加、松くい虫やナラ枯れなど病害虫被害の発生、労働力不足などの課題を抱える。県産業技術センター（林業研究所）は、優良林木の育種や増産技術の研究を行い、豊富な森林資源の循環活用を支えている。

挑め!

壁の向こうへ

青森県産業技術センターの研究

クロマツ、病害虫に強く

ヒバ振興へ成長早い品種も



抵抗性クロマツの採種園で着果調査する研究員＝3日、十和田市（青森県産業技術センター林業研究所提供）

だ。松くい虫は、体長1センチほどのマツノサイセンチュウがマツノマダラカミキリを媒介に伝染する病気で、感染すると水を吸い上げられなくなるなどして枯死する。全国的に被害は下火になりつつあるが、地球温暖化の影響は深刻だ。県内では、2010年に

蓬田村で初確認。11年以降は深浦町を徐々に北上する形で断続的に発生。県南地方でも18年に南部町で被害が確認された。いずれも、被害地域の拡大は防いでいるが、毎年被害が多く、植え替えの需要があるクロマツについて、田中功二研



他県から導入して増殖した抵抗性クロマツの採種園

◆青森県産業技術センター林業研究所 1961年、林業試験場として発足。2009年の地方独立行政法人化で現在の名称になった。木材の利用・加工技術やキノコなど林産物振興を行う森林資源部と、優良林木の育種や病害虫対策を担う森林環境部の2部門で構成する。十和田市にさまざまな木の採種園が並ぶほか、東北町には近年需要が高まるカラマツ専用ほ場の2供採種園がある。

の開設は17年から本格的に着手した。抵抗性品種の開発は、被害林の中で生き残った樹木を活用。地域の気候に適したものを作るには、地元で選抜した品種での開発が望ましいが、県内の被害林地は限られる。そこで、比較的環境に近い秋田県などから抵抗性品種を導入。接ぎ木によって採種木を増殖し、来年に種を取り、26年にも実際に植栽が可能になる予定だ。

林業振興に向けた品種開発にも取り組む。特に力を入れるのは、「県の木」として親しまれている青森ヒバの優良品種の開発だ。国内蓄積量の3割以上を青森県が占めるが、高度経済成長期の大量伐採後に再造林が進まず、資源量は大きく減った。素材の良さを

ら住宅用として人気が高いものの、伐採期まで80年以上かかるのが要因だ。そこで、造林の促進を図るべく、約50年で伐採できるカラマツを目標に優良品種の開発を進めている。県内各地のヒバの成長率や抵抗性などを調査し、杉並みの成長速度となる優良品種を選抜した採種園を昨年整備。5年近くかけて挿し木用の穂木を生産し、苗木業者に売り出す。「木の研究はすぐに結果は出ず、植えてみないと分からない部分も多い」と田中氏。「それでも再造林を進めなければ資源の循環が止まる」と強調し、周知にも力を入れ、研究成果の活用を促す考えだ。（佐藤航）

※第1月曜日企画

デーリー東北新聞社提供（令和4年6月6日掲載）

※この画像は、当該ページに限ってデーリー東北新聞社が利用を許諾したものです